
このわたがしのように

千鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

このわたがしのように

【Nコード】

N1669M

【作者名】

千鳥

【あらすじ】

今日も今日とてケロロたちは侵略活動、そして失敗してお仕置きそこにサブローがきたのは、ただの偶然

どっかん

ある意味、聞き慣れた音がしてサブローは昼寝をしていた木から寝ぼけ眼でそちらを見た。爆発オチだ。よくあることだ。

普段ならそのまま2度寝にはいるのだが今日は木から降りて、そちらに向かうことにした。とくに理由はない。あるとすれば昨晚見た映画がつまらなくて寝てしまったからだ。夜にたっぷり眠ってしまった。もうあんまり眠くない。

それでもサブローは欠伸をして実体化ペンで大きな紙飛行機を描いて乗って、ふわふわふわふわそちらに向かう。

日向家、その庭には大量のなまことわりばしが散乱していた。壁にもなまこがへばりついている。相変わらずケロロ小隊の侵略作戦は不可解なものが多い。

「こんにちは」

明るく挨拶して庭からリビングにはいる。リビングの真ん中には色とりどりの宇宙人がいそいで投げ込まれた洗濯物みたいに折り重なっていた。5人全員アフロなので鮮やかさも増す。

「こりゃスゴい」

いったいどういった作戦だったのか、そしてそれがどう失敗したのか目視ではさっぱりわからない。

「あサブロー先輩、こんにちわ。お茶用意します」

いくらか憔悴した面持ちでキッチンにへたりこんでた夏美が言う。
「おかまいなく」

といっても夏美の手はてきぱきと急須と湯のみをセットしている。

「お手伝いします夏美さん」

小雪も立ち上がるが、いさめられる。

「大丈夫よ、小雪ちゃんも疲れたでしょ休んで」

その横には日向冬樹、西澤桃華もいる。

どうやら全員集合で面白いことをしていたらしい。惜しいことをした。サブローは腹の底で舌打ちをひとつ。

「サブローさんがもう少し早く来てくれたらここまでならなかったのに」

「ゴメンね、寝てたよ。いま起きたんだ」

正直に言う。

「まったくボケガエルつたらろくなことしないんだから」

彼女の真つ当な感想に苦笑い。ケロロたちはいつもろくなことをしない。しかも今回はかなり派手な作戦だったようだ。

5人の宇宙人は全員ぴくりとも動かず、くたばっている。サブローが来たことにも気付いていない。完全に気を失っている。

「目が覚めたら掃除してもらわなきゃ」

御愁傷様、サブローは口の中でぽつりと呟いた。

おそらくいちばん最初につかまりリビングに放り込まれたであろう、相棒の黄色は1番下でへばっている。重いだろうし苦しいだろう。

サブローはずりずりひきずりだして腕の中にしまう。

紫のアフロを後ろに放り投げ、割れた眼鏡と歯の隙間からもれる煙を見て、もういちど苦笑い。

いったいなにをしたのやら。そしてこの湧き出る感情はなんなのだ。サブローの小さな笑いとはまらなくなり、隣の桃華が訝しげにのぞいてきた。

「どうかなさったんですか？」

彼女の柔らかな声に応えてやる。

「いや、みんな笑うだろうけど、可愛いなあと思って」

「……………」

笑いはしなかったが妙な空気が流れた。

オカシな人だとは全員が知っていたが突き付けられると言葉がでない。クルルと可愛いという単語はほとんど親和性がない。

素になつたのか裏だつたのか、桃華は立ち上がっていささか乱暴に真ん中のタママをひきずりだす。片手で。

「うちのタマちゃんの方が6億倍は可愛いです」

瞳孔をひらいて同じく口から煙を吐いている。

「いえ、今はこんなですけど、いつもはもっと本当にとっても可愛いんですから」

紅いアフロを後ろに放り投げ、ぎゅっと抱きしめる。可愛いケロン人といえばタママだ。ゆずれない。

だが相手はなにしろ変な人。

「面白いね。僕はクルルがいちばん可愛い」

「いいえタマちゃんの方がずっとずっと可愛いです」

桃華もひかない。そしてこの言い争いに黙つてられなかった人物がひとり。立ち上がって緑、青、赤と重なった中から当然青をひきずりだす。

「いちばん可愛いのはうちのドロロです」

やはり白目を向いて煙を吐いてる。

水色のアフロを後ろに放り投げ、さらに見せつける。

「うちのドロロはアレです。可愛いうえに賢いんですから」

サブローが軽く息を吐く。

「賢いと言いだしたらクルルには勝てないよ」

そして桃華は黙るしかない。賢さでは勝てない。

小雪も別のものをだすしかない。

「うちのドロロは親切です、すごく優しいんですから」

「あー……」

「くう……」

サブローだけでなく桃華もうめくしかない。

「親切では勝てない」

「優しい子なんですけど親切と言われると……」

なにしろ小隊の腹黒コンビ。

それを桃華もサブローもよく知っていた。というか親切でドロロに

勝てるメンバーはいない。

「だからいちばん可愛いのもドロロです」

「それは違うつてクルルだよ」

「タマちゃんにきまつてるじゃありませんか」

日向姉弟はこのやりとりを半ば呆れるように聞いていた。さつきまでも騒ぎを忘れ可愛いだの賢いだの親切だの、宇宙人を我が子のように自慢する3人が不思議でならなかった。ぐちゃぐちゃになったのが自分の家じゃないだろうか？少し恨みがましい感情さえ出てきてしまう。

「冬樹クンもケロロがいちばん可愛い？」

聞かれたときも一瞬わからなかったぐらいだ。

赤にのっかられた緑をひきずりだす。黒いアフロを後ろに放り投げ煙を吐く隊長を見つめる。

「可愛いはよくわからないけど僕にとって軍曹はいちばん大事な友達なんだ」

そう言つて抱きしめる。嘘を言つたつもりはなかった。それが冬樹の心から感じていることだった。だがどうやら納得してもらえなかったようだ。

「大事とか言いだしたら僕だつてクルルが大事だし」

「そうですね。あたしだつてドロロのこと、とってもとっても大事なんですから」

「そして可愛いのはタマちゃんです！」

「違うつて」

「ドロロのほうが可愛いですよ」

やっぱり日向姉弟にはよくわからない会話だった。3人にはおのおののパートナーがいちばん可愛く見えるらしい。冬樹はケロロを見る。だがやっぱり、なんだかよくわからない。大事な友達、大切な友達。可愛いと言われるとわからない。

「姉ちゃん、ギロロ可愛い？」

「可愛いわけじゃない！」

やはり姉弟だと安心した。そしてギロ口が起きてたら傷付いただろうなと思った。

お茶をもってきた夏美はサブローと小雪のあいだに座って、みんなに湯のみを渡しながらぷりぷり怒った。

「いっつもいっつも面倒ばっかり起こすし騒がしいし。可愛くなんかいいわよ」

夏美の意見はもつともだろう。なにしろケロ口小隊のいちばんの被害者は夏美だ。ケロ口小隊に被害をくわえるのもまた夏美なので、なかなか可愛いと思える間柄ではない。

「でもそれはケロ口たちの存在意義みたいなもんでさ。ひとりひとり別々で見たら夏美ちゃんギロ口が可愛いって思わない？」

「思わないです」

「あ、そうなんだ」

大好きな先輩の意見とはいえ、それとこれとは別問題らしい。とはいえ5人の真ん中でひとりへばっているギロ口を見て、心が痛まないわけでもない。他の4人がおのおののパートナーに引き取られているのに、ギロ口だけ床に放りだされているのだから。

夏美は恐る恐るといったふうにギロ口を膝にのせて金色のアフロを後ろに放り投げた。ちくちくするのだ。

「なんだ姉ちゃん」

「違うわよ！なんか可哀相じゃない。ひとりだけ残されててさ」

可愛がつてるなんて思われたくない。夏美は膝にのせるだけで、お茶を飲むことに集中する。サブローはちよつとだけ考えた。

「可愛いっていうのが、なんか違うのならさ、大事っていうのは？ギロ口が大事な友達っていうのない？」

「ないです」

随分きっぱり言ってくれる。

「あ、そうなんだ」

サブローもひくしかない。

夏美にしてみれば小雪やサツキやヤヨイのほうがずっとずっと大

事な友達らしい。つくづくギロロが起きてなくてよかった。

「じゃ夏美さんはあ、赤いお友達のことお嫌いですか？」

小雪の質問に夏美は首を振る。

「嫌いつてことはないわよ。でも可愛いとも賢いともなんとも思わないし。いちばん大事つてわけでもないってだけ」

その答えを聞いてサブローはちよつと考えて聞いてみた。

「たとえばさ、ケロロたち5人が死にそうな病気になってます。夏美ちゃんは治すことのできる薬をひとつだけ持ってます、っていうときどうする？」

「放つときます」

「……」

さしものサブローも言葉につまったが、たしかにそれがいちばん正しい選択だろう。

「まあ放つときゃクルルが自分で薬つくるだろうしね」

自分でだしておきながら失敗だったなと首をかく。小雪は手をあげて発言。

「たとえばー、崖にドロロたち5人がぶら下がってて、いまにも落ちそー。夏美さんは誰から助けますか？」

「放つとく」

「……」

これもまた正しい選択だろう。

「まあ確かにドロロが崖から落ちることないですからねえー。みんなドロロが助けるでしょうね」

桃華も聞いてみた。

「たとえば冬山遭難しているタマちゃんたち5人、やっと見つけた夏美さんが1枚だけチョコレートを持っていたら、だれに渡します？」

冬樹が横から口をはさむ。

「西澤さん、それは5人で分けて食べればいいんじゃない？」

「ああ、そうですね」

失敗の質問かと思われた。しかしそうでもない。

「それタママに渡したら独り占めしそうじゃない？」

サブローの意見はもつともだ。なにしろタママは無類のお菓子好き。

「軍曹もあやしいな。なんだかんだいってひとりで食べちゃいそう」
冬樹はケロロをよく見ている。

「ドロロに渡したら、きつとみんなにとられちゃうんでしょねー」。

そしてドロロ泣いちゃうんでしょねー」

「クルルは多分意味なく地面に叩き付けるね。しかも笑いながら踏みにじる」

地球人はそれぞれ自分たちが腕に抱く宇宙人をよく見て、よく理解している。

夏美も膝のうえのギロロを見ていた。

冬の山、遭難、チョコ1枚。自分はどうするだろう。夏美にはわかったことがある。

「あたしはギロロのこと可愛くともなんともないですけど信用はしてるかも」

「ほらっ」

サブローは手を叩いた。

「そうなんだ。僕たちはそれぞれ宇宙からやってきて一緒にいくれるそれぞれのパートナーが大事なんだ。なんといっても初めての宇宙人の友達なんだしね」

サブローと小雪にしてみれば生涯はじめての友達だ。

遠い星から自分たちの元にたどりついてくれた愛すべき侵略者たち。

「でも迷惑には変わりないんですけど」

「はは」

一緒に暮らしていないがゆえ被害の少ないサブローにはあまり関係ない話。とはいえどんなに迷惑だろうと大切に可愛くて賢くて親切な信頼できる友人なのだ。とてもとても大切なトモダチ。ずっと一緒にいたい、手放したくない。

ふいにサブローの腕の中の黄色がもぞもぞ動きだし、小さな手でジャケットの裾をつかんだ。そして体をあずけたまま

「くゆ……」

と、もらした。

たまらずサブローは拳をかためる。そして隣の桃華に言う。

「ほら、やつぱり。僕のクルルがいちばん可愛い！」

いや気持ち悪くないですか、それ？日向姉弟は若干ひき気味。でも桃華は心底口惜しかったようだ。

「そういう仕草とか不意にもれる言葉はズルいですわ」

そのとき桃華の腕の中のタママが額をすりよせてきた。

そして

「モモツチ……」

と呟いて、口の中をもごもごさせる。

「はぁータマちゃん……」

桃華は感動で打ちふるえる。

「寝惚けて名前を呼ぶコンボはズルい。可愛すぎる」

「やつぱりタマちゃんがいちばん可愛いっ」

今度はサブローが悔しがる。

小雪も口惜しいようだ。

「寝ているときに名前よんでもらえたら嬉しいですよえ。いいなあー」

「そうね、なんか心許してくれてるんだなあって、ちょっと嬉しくなっちゃうかも」

さしもの夏美もこれに同意した。そして冬樹は驚いた。

姉ちゃんもそっちいくんだ！どうしよう僕全然そんなの思わない！冬樹はケロロを膝においたまま地味に孤独と戦っていた。

ケロロはたしかに大切な友達なんだけれども可愛いとか甘えてほしいなんて思ったこと一切ないからだ。まあ普通にトモダチに抱く感情ではないのだが。

冬樹が孤独な戦いに挑んでいるとき同様にひとり戦っていたのは

戦士ギロ口だ。

元よりケロン人は体が丈夫。

実のところ大爆発に巻き込まれながらもギロ口はすっかり意識を取り戻していた。だが今起き上がると地球人たちの空気を乱すように気絶したふりを続けていたのだ。つまり夏美の辛辣な評価に逐一心を痛めていたし、信頼しているという賛辞も聞いていたのだ。

そしていま夏美は言っていた。

「寝惚けて名前を呼んでくれたら心を許してくれてるんだなあって嬉しくなっちゃう」と。

名前を呼ぶべきだ。

今こそ夏美の名前を呼ぶべきだ。ギロ口にはそれがわかっていながら行動に移せなかった。緊張しているのが自分でわかっていたからだ。

なにしろ今ギロ口は夏美の膝に頭をのせている。俗にいう膝枕。

夢にまで見た夏美の膝枕にいるのだ。

少しでも気をゆるせば顔は火が出るように燃え尽きるだろう。心臓は既に体の外に飛び出さんばかりに早くうつてる。

落ち着け、落ち着くんだ。

戦士らしく自分をいさめてギロ口は必死で冷静を装う。そして寝惚けたふりもしなくてはならない。

夏美はギロ口を信頼してると言ってくれたのだ。

それは戦士にとって最高級の賛辞。それに応えてやらなくてはならない。俺も夏美を信用している。背中をあずけられる最高のパートナーだと思ってる。それを示してやらなくてはならない。

それを表現しなくてはならない。

名前を呼ぶだけでいい。たった一言、名前を呼ぶだけでいい。それで夏美に伝わることもある。夏美がそれを喜んでくれるのならそうするべきだ。

だがなぜだかいつものように声がでない。

どう声をだせば寝惚けたふうになるのかわからない。ギロ口は瞬

時に演技ができるほど器用な奴じゃない。

せめて絞りだすようにうめいた。

「な、なつみつ……」

かえってきたのは、あっさりとした一言。

「なによ」

それが若干不機嫌なようでギロ口は体を起こした。

既にリビングはだれもいなく、向こうのキッチンで夏美がまな板に白菜をのせていた。そしてばやいた。

「あんた、いつまで寝てんのよ。さつさとボケガエル手伝って掃除しなさい」

庭を見やると緑と青の幼馴染みが籠を背中に片付けていた。そこに黄色と黒。合わさると危険なデンジャラスカラーの後輩たちはいなかった。

「タママとクルルはどうした」

夏美を手伝っている冬樹が応えた。

「タママとクルルは西澤さんとサブローさんが連れて帰ったよ。よく寝てるから、このまま持って帰るって」

2人がそろってにこにこしていたのが冬樹には相変わらずよくわからないが。

「サブロー先輩が壁はキレイにしてくれたんだから、あんたたちはさつさと残りを片付けなさい」

きつぱりと告げられギロ口も渋々庭に向かう。

ひとり考え込んでいるあいだに随分と時間がたったようだ。おかげで夏美の膝枕も感触もよく思いだせない。

おいしいことをした。口惜しさがにじみ。また別の色になる。

「なまこーっ！」

「うっさいわね」

ギロ口はなまこが大嫌い。

青い幼馴染みがビニール袋を手渡している。

「あっちのなまこはもう片付けたから、ギロ口くんは割り箸を片付

けてくれる」

いちいち気のつく友人だ。ありがたいやら情けないやら。仕様がな。ギロロも失敗した作戦の後始末に参加した。

どんな作戦でもやってるあいだは楽しいものだ。そして終わった、あとは空しい。それが失敗した作戦ともなると空しさはふくれあがる。

ほどなくしてケロロが口を開いた。

「いつ、目が覚めた？」

短い文章で真意が伝わる。

さすが幼馴染み。さすが有能な軍人。

「小雪殿にひきずりだされたときには大体……。ケロロくんは？」

「我輩もそれくらいかなあ。ギロロは？」

「サブローがクルルをひきずりだした頃だな」

なにしろケロン人は丈夫なのだ。

「ていうことはさあ、クルルもタママも多分目が覚めてたよね」

「……」

ギロロとドロロにはケロロの言わんとしていることがわかった。

さすが幼馴染み、さすが有能な軍人。そしてさすがいつも貧乏クジをひかされているだけのことはある。

「起きててアレがやれるのかあ……」

「小雪殿が望んでいるとはわかっていても、どうしても……」

ギロロとドロロ、そしてケロロには寝惚けたふりして甘えるということが出来なかった。

「これが若さか……」

ケロロは傾きつつある太陽に目を細め、ぼつり呟いた。

おそらく今タママは桃華に最高級のお菓子をもらいクルルはサブローお手製カレーを食ってたりするんだろう。ケロロたちはお片付け。「ほらサボってないの！」

叱られながらお片付けだ。

次の日。

悪びれもせず帰ってきた参謀といつもとおりの二等兵は先輩方が片付けたであろう、なまこをポン酢で食べていた。

「んまいですう」

「しみるぜえくく」

なまこ嫌いのギロロには信じられない。

「ギロロ先輩つては味覚がお子様ですう」

「バルサミコ酢があうらしいぜえ」

「ああ僕にも分けてくださいですう」

ドロロは思うケロロも思う。ついでにギロロも思う。

「別に若いっただけじゃない」と。

わたがしのように甘く、このわたのようにしみる、愛すべき後輩ども。

「うまうまですう」

「くく」

次は5人で片付ける作戦をたててやるとケロロはかたく誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1669m/>

このわたがしのように

2010年10月8日14時35分発行